

## 菅原道真の漢詩表現と中国語

静永, 健

九州大学大学院人文科学研究院文学部門 : 助教授 : 中国文学

<https://doi.org/10.15017/9615>

---

出版情報 : 中国文学論集. 31, pp.30-47, 2002-12-25. 九州大学中国文学会  
バージョン : published  
権利関係 :



## 菅原道真の漢詩表現と中国語

静 永 健

今を遡りて恰恰一千百年前に亡くなられた菅原道真（公弼）<sup>1</sup>以下本稿では敬意を表し菅公および道真公と称す<sup>2</sup>は、単に我が国九世紀末の一漢詩人というだけでなく、日本漢詩文学の歴史の中で、決して忘れ去られることのない崇高な存在である。その作風は、菅公自らも認めるように、中国九世紀初頭、すなわち中唐の詩人白居易（七七—八四）を軌範とし、その詩文集『白氏文集』を、我が国の文人の中でもいち早く、そして極めて豊かに、自己の詩歌創作の中に取り入れたことは、すでに贅言を要せぬほどに検証されてきたところである<sup>3</sup>。

さて、現代においても「学問の神」として崇められる道真公であるが、その実像は如何なる人物だったのか、特にその学識は、果たして如何なる広がりや深さとを有し、いったいそれはどのようにして涵養されていったものなのか等については、いまだその多くが判明しているとは言いがたいであろう。就中、菅公は、おそらく当時の唐長安の中国語（漢音）を解せられたと拝察するのだが、その語学力はいったいどれほどの水準にまで達しておられたのであろうか。このことは、ただに道真公一人に投げかけられるべきものではなく、平安知識人層の人々における当時の一般的な「知の世界」を窺う上でも、大変興味深い問いである<sup>4</sup>。もとよりその論証は、ひとり本稿のみによって尽くし得るものではなく、今後更にも幾重もの考察が必要であるが、筆者がまずこの問題の初探として着手したいのは、その漢詩表現、すなわち道真公の詩語についてである。菅公の漢詩には、これまでにも幾つかの指摘があるように、多くの唐代の俗語（口語的表現）が含まれている<sup>5</sup>。このことは当時、菅公が如何に唐長安の言語に精通していたかを物語るものと言えよう。一方、そのような口語表現とは正反対に、同時によく指摘されるのが、

菅公を含む日本漢詩人に均しく見られる言葉の限界、つまり和習（和臭）の問題である。<sup>6)</sup> この和習表現と唐代の口語語彙とは、道真公の漢詩世界において、いったいどのような関係にあると言つべきものであるうか。以下、本稿は、まことに無難ながら、これらの問題について筆者なりに考察を試みた、その報告である。

—

今日、一般に外国語と言えば、その多くはごく日常的な会話が念頭に想起される。しかし、殊に中国語においては（現代の北京語＝普通話においても）、滑らかで淀みのない会話力もさることながら、同一の概念を言い表すにおいて、言葉を慎重に吟味推敲し、時として得意即妙の故事成語などを交えた表現が求められる場合が多い。つまり、互いの意志疎通のみを目的とするのではなく、表現の豊かさや、平素からの古典の読書量が求められる点に、その比重が今もなお幾ばくかの大きさを保っているように見受けられるのである。『論語』をはじめとする多くの古典籍の言葉が、日々の報刊・散文随筆類の中に習見される現象は、もはや一一の例を挙げる暇もない事実であり、やや誇張して言えば、それら古典籍の言葉を用いずに文章を書くことの方が、むしろ困難なよつでさえある。道真公の時代において、『論語』や五経、『史記』『漢書』、そして『文選』『白氏文集』などが盛んに読まれたのも、<sup>7)</sup> 現代の我々のように、単に個々人の知的欲求を満たすための、純粹で高尚な読書行為としてのそれである以上に、文明国中国に向き合い、その流麗高雅な言語表現に少しでも近づきたいという、根源的で地道な訓練活動の一環として見た方が、よりスムーズな理解に到達するようにも思われるのである。

さて、そのような道真公における語学的な学習環境を窺つ例として、まずは次の有名な作品に注目しておきたい。菅公晩年の太宰府での絶唱の一「九月十日」詩である。

九月十日

九月十日

去年今夜侍清涼

去年の今夜

清涼に侍し

御在所殿名。

御在所の殿の名なり。

菅原道真の漢詩表現と中国語

秋思詩篇獨斷腸

秋思の詩篇 独り断腸

勅賜秋思賦之、

勅もて秋思をば之を賦すを賜ふ、

臣詩多述所懷。

臣が詩は多く懷ふ所を述ぶ。

恩賜御衣今在此

恩賜の御衣 今 此に在り

捧持毎日拜餘香

捧げ持ちて毎日 餘香を拝す

宴終晚頭賜御衣、

宴の終晚頭に御衣を賜ふ、

今隨身在箇中、故云

今身に隨ひて箇中に在り、故に云ふ

『菅家後集』四八一

この詩は、延喜元年（910）、太宰府での最初の秋を迎えられた頃の作品である。ときに菅公五十七歳。

道真公は、その前年の九月十日、禁中清涼殿での「重陽の後宴」に参加し、勅命を奉じて応制「秋思」詩を詠んだ。そして、見事観感にあづかった菅公は醍醐帝より御衣を下賜される栄に浴したのだが、あろうことかその一年後、かかる太宰府の謫居に謹慎する日々を過ごしていよつとは、当時は知る由も無かつたのである。一年前と現在、都と太宰府、栄光と遷謫……。時間と空間そして自己の境遇における二重三重の対比によって、この詩はますます美しくも悲しい叙情的旋律を生み出している。そして、その一切を繋ぐ紐帯として転句「恩賜の御衣」は存在するのだが、都、そして、みかどに対する今もなお決して衰えることのない誠実な気持ち、道真公はただ「餘香を拝す」という穏やかで静かな動作によって、実にしめやかにこの作品を結んでいるのである。まことに名作と称するに相応しい作品である。

筆者がここで問題としたいのは、その名句「餘香を拝す」である。もとよりこれは、下賜された御衣に何がしかの薫香が焚きしめられていて、今もなお微かにその残香が染せられるという、まさに目前の事実を述べた表現でもあるだろう。しかし、たとえばこれを更に分析し、「過去への追憶を嗅覚によって蘇らせている」と解した場合、そこには詩の本来の情調と幾分かの違和感が生じてしまうように思われる。

そこで、これを更に中国文学の伝統に照らし合わせて考えるならば、その「拝餘香」とは、現実の聞香であつて勿論よいのだが、同時に、かつてその香衣を着用していた人物（すなわち醍醐帝）に対する、婉曲で暗示的な敬慕

景仰の心情表現であつて、極端に言えば、もはや現実の薫香はほとんど嗅ぎ取れずとも、その「無香の香」（人品・風格）をこそ菅公は拝しているのだと説明することは、あながち牽強附会の説とは言えないであらう。

例えば盛唐の大詩人李白（七〇一―七六二）には、先輩詩人孟浩然（六八九―七四〇）に贈つた次のような詩がある。

贈孟浩然

孟浩然に贈る

吾愛孟夫子 風流天下聞

吾は愛す 孟夫子 風流 天下に聞こゆ

紅顏棄軒冕 白首臥松雲

紅顔より軒冕を棄て 白首なお松雲に臥す

醉月頻中聖 迷花不事君

月に酔へば 頻りに聖あに中たり 花に迷ひて 君つがに事へず

高山安可仰 徒此揖清芬

高山 安んぞ仰ぐべけんや 徒らに此に清芬を揖す

〔清・王琦注〕『李太白集注』卷九

李白は敬愛する先輩の「風流」な事績を述べ、孟子を「高山」の如く賛美する。そして、先輩を仰ぎ慕う自己を謙遜し、あくまでも控え目に「いたづらに夫子の清らかな香氣（清芬）に對し深々とお辞儀するばかりだ」と結んでいるのである。道真公の「拝餘香」は、目前の景であると同時に、この李白詩の如く、相手への深い尊敬の念を伝える婉曲な表現である、ということはこの「九月十日」詩を理解する上で一度は確認しておいてよい事柄であると思われる。

なお、白居易にも「遊襄陽懷孟浩然（襄陽に遊びて孟浩然を懷ふ）」と題する詩（『白氏文集』卷九、四〇三）があり、そこには正にこの李白詩を踏まえて「南望鹿門山、藹若有餘芳（南のかた鹿門山を望めば、藹若として餘芳有り）」という句が見える。李白のこの表現は、古くは『文選』卷十七、陸機「文賦」の「詠世徳之駿烈、誦先人之清芬（世徳の駿烈を詠じ、先人の清芬を誦す）」に直接の典拠を持つものであるが、更に中国文学史の大きな視野から俯瞰すれば、薫香を発するものが良き物体であり、それを人物に求めると、その人の德行や氣品に通じるといふ考え方は、夙に香草文学とも称される『楚辭』に始源を發し、中国文学の伝統の中に深く根差した考え方である。道真公のこの「拝餘香」といふ表現は、その直接の典拠こそ俄には示し得ないが、その詩藻の奥に、かかる中国文学の伝統に対する造詣の深さが窺われるのである。

道真公の漢詩の中で最も人口に膾炙し、更に、本稿にいう 唐代の口語表現 が数多く駆使されている作品は、まさしく次の「不出門」詩である。ちなみにこの詩も、延喜元年（九一〇）秋の作。

不出門

門を出でず

一從謫落就柴荆

一たび謫落せられて柴荆に就きしより

萬死兢兢踣踏情

万死兢兢たり 踣踏の情

都府樓纔看瓦色

都府樓は 纔かに瓦の色を看

觀音寺只聽鐘聲

觀音寺は 只だ鐘の声を聴くのみ

中懷好逐孤雲去

中懷は 好く孤雲を逐いて去り

外物相逢滿月迎

外物は 満月を相逢いて迎ふ

此地雖身無檢繫

此の地 身の檢繫さること無しと雖も

何爲寸步出門行

何為れぞ 寸歩も門を出で行かん

さて、これは既に自明の事柄に属するとも思われるが、この詩には数々の口語的な表現が配置されている。まずは第一句の「一從」<sup>(13)</sup>、そして「就」<sup>(14)</sup>（一本では「在」<sup>(14)</sup>）、そして第三句の「纔」と第四句の「只」<sup>(15)</sup>などである。

これらのうち特にここで注意しておきたいのが第三句「纔」字の用法である。この言葉は、漢文訓詁において一般に「わづかに」と訓まれる。しかし、この言葉の副詞としての意味には、Aさまさまな経緯があつて ようやくその動作に至った（落着した）ことを示す場合と、B数量的にほんの すこし しかその動作が行われなかった（微量にとどまった）ことを示す場合との、二つのニュアンスが共存している（もちろん、その両義は渾然として 辨別し難い場合が多いが）。例えば、白居易詩に各々一つずつ例を取れば、

半空直下視 人世塵冥冥 半空より直下に視れば 人世は塵冥冥たり

「菅家後集」四六

漸失郷國處 纒分山水形 漸く郷國の処を失ひ 纒かに山水の形を分かつ（とき）  
東海一片白 列岳五點青 東海 一片白く 列岳の五點青き（ものが見えた）

〔夢仙詩〕：『白氏文集』卷一、〇〇五

菅爲彭澤令 在官纒八句 嘗て彭沢令と爲り 在官 纒かに八句  
愀然忽不樂 挂印着公門 愀然として忽ち樂しまず 印を掛けて公門に着け  
口吟歸去來 頭戴漉酒巾 口に「歸去來」を吟じ 頭に漉酒の巾を戴く

〔効陶潛體詩十六首〕其十二：『白氏文集』卷五、〇三四

という詩句が挙げられる。

前者は、Aの ようやく あるいは かすかに の意に解し得る例。かつて夢に仙界に至った者の述懐を写した部分であるが、その中間二句は「天空を昇るにつれて、だんだん自分の故郷の所在がどこなのか見分けがつかなくなり、かすかに山と河の形状によって識別できた」という意味である。一方、後者は、陶淵明の故事で既に判りのようにBの すこし および たったの…だけ の意味、つまり「彭沢令の職に就いていたのは、たったの八十日であった」と解釈できる例である。

ところで、これを菅公の詩句「都府楼は纒かに瓦の色を看ゆ」に繋げると、実は二つの相反する解釈が可能となる。すなわち、A ようやく の意に解した場合、謫居より望見される都府楼の景は、遙か遠く「かすかに」見える、という意味になり、B すこし の意に解せば、（道真公は）都府楼の方角を向いても「ちらりと」瓦屋根に目を遣るに過ぎない、という意味になるのである。

勿論この詩句の場合、後者Bが正解となる。現在伝えられる菅公の謫居（現福岡県太宰府市の樓社）は、太宰府政庁跡から僅か一キロメートルにも満たぬ至近距離にあり、前者の遠望の景は、現実の地理に即して成り立ち得ない。しかも問題はそればかりではない。前者Aに解釈した場合、それはただ謫居から見える実際の風景を詠じたに過ぎないが、後者Bに解釈すれば、そこに表現されているものは、もはや囁目の風景ではなく、菅公の現在の心境を如実に吐露したものである。すなわち道真公は、ここ太宰府に左遷され名目上は「太宰権帥」の官職を

忝なくしているが、流謫の身の故に、政庁に出仕することも叶わない。しかし、この「纒に瓦色を見る(のみ)」という動作は、かかる朝廷に対する憤懣も、また復帰への期待もはや消え去り、現世の一切にはかくも欲するところが無くなったという、現在の菅公の心情をこそ表白したものと解釈できるのである。

加えて、この解釈は次の第四句「観音寺は只だ鐘声を聴くのみ」との対応関係において、より一層確かなものとなる。この「只」は、禅語「只管打坐」の例が示すように、ひたすら および しみじみとと解し得る言葉であり、ここでもそのように理解してよい。従って、鐘声を耳にするばかりの僻遠の地に謫居している、という意味ではなく、観世音寺の鐘声にただひたすら耳を傾けるばかりで、そこに参詣しようという気持ちはさらさら無い、という菅公の意志を表明した句と解釈できる。つまり、第三句「都府楼」は、道真公にとって現世の象徴であり、対する第四句「観(世)音寺」は、言わば来世の福徳を祈るべき場所であるが、「万死に値する罪に戦々兢兢」とし、跼天踏地の毎日」を送っている菅公にとって、もはやともに「門を出でて行く」べき処ではない、との一種の諦観を示しているのではないだろうか。<sup>16)</sup>

以上の解釈に至ったとき、筆者は改めて菅公の「纒」「只」「二字」の用語的確さに驚くとともに、道真公のその語学習得の水準が極めて高いレベルのものであったであろうことを拝察した。この二字の副詞は、畢竟何らかの和訓に置き換え、それに依拠して理解できる言葉ではなく、原語(中国語)をそのままに取り入れ、自らも何度度も繰り返し口にすることによって、はじめてその微妙なニュアンスが体得できるものだと思うからである。

三

続いて、同じく「不出門」詩の頸聯(第五・六句)の問題に触れたい。なお、この対句の最も難解な用語「中懐」「外物」の意味については、本稿注(15)に掲げる菅野礼行氏の詳細な論考がある。筆者も菅野氏の考証に従い、「中懐」を道真公の「こころ・精神」と解し、「外物」は、その中懐を包み込んでいる道真公のからだ・身体と考えるものとする。



さて、ここで問題としたいのは、これらの言葉に続く下四字「逐孤雲去」「逢満月迎」の文法である。<sup>17)</sup>

この各四字は、対象となる目的語（孤雲・満月）を二字の動詞で挟み込んだものであり、現代北京語の会話でも例えば「他已经回家去了（彼はもう家に帰ってしまいました）」のように使用される。そして、特に目的語直後の「去」字は、語気として単に動作の方向を示すのみの言葉「方向補語（趨向補語）」として文法的に説明されているものである。ところが、この第五句の解釈をめぐっては、例えば注（一）に挙げる川口久雄氏の頭注では「精神の内部はちぎれ雲とともにみんな去って行ってしまつて、空虚である。ままよそれでいい。」と解釈されている。思うに「空」なる境地とは、果たして「中懐が去る」ということで実現され得るものなのであるか。

私見では、ここでも道真公は、特に日本語の意味（和訓）をもたない中国語を駆使し、口語調の軽やかさを出そうとしているのではないかと思われる。従つて第五句末「去」字には、去る という日本語の意味は全く存在せず、ここでは敢えて日本語の訳語を当てはめぬままに解釈することが至当と考える。すなわち「わたしのところは青空に浮かぶ孤雲をどこまでも逐いかける」とするのが、最も穩当な解釈のように思われるのである。<sup>18)</sup>特に「去」字を去る もしくは 消し去る と解釈し、「左遷の身にある鬱懐が晴れた」とする説は、左遷のまま悲劇のご生涯を閉じられたという道真公の伝記に引きずられ、いささか本文を曲解した感があるようにも見受けられるのである。ところで、このように、方向補語を用いるなど目的語を二字の動詞成分の言葉で挟み込む句法は、おそらく当時の中国（唐）における少しくだけた口語（会話文）に来源が求められるであろうが、かかる一見何気ない会話を樂しむかのような表現は、まさに中唐の詩人白居易の得意とするところであつた。

題王家莊臨水柳亭

王家莊の臨水柳亭に題す

弱柳縁堤種

虚亭壓水開

弱柳は堤に縁りて種系、虚亭は水を圧して開く

條疑逐風去

波欲上階來

條は風を逐ひて去るかと思ひ、波は階に上り來たらんかと欲す

翠羽偷魚入

紅腰學舞迴

翠羽は魚を偷まんと入り、紅腰は舞を字びて迴る

春愁正無緒

爭不盡殘盃

春愁は正に緒無し、争で殘盃を尽くさざらん

「白氏文集」卷六十四、三三四

右の詩は、王氏の莊園に遊び、その池水のほとりにある亭子の情景を詠んだ作品である。春のうららかな風景と

して、柳、亭子、そして風そよぐ柳枝、水面のきらめき、魚取る水鳥へと、徐々にその点描の焦点が遠景から近景へと迫り、最後に舞の稽古をする妓女たちを描き入れて、作者のやるせない春の思い（春愁）として詩が結ばれている。洛陽にて悠悠自適の生活にある白楽天の、まことに老練円熟した心境を看取できる佳品の一つである。面白いのは第一句から頸聯第六句までのすべての句において、末尾の三文字が上述「挟み込み」の句法を用いて創作されていることである。これは白氏の意図的な修辞であり、ここではこのような語法を大胆に重ねてゆくことによって、作品全体に、まさに春ののんびりとした雰囲気をもし出していると考えてよいであろう。

そして、ここで確認しておきたいのは、第三句「條は風を逐ひて去る…」の語法とその意味である。これは、見での通り池辺の柳を写した句であり、菅公の詩と同じく「逐…去」の二字によつて、目的語「風」を挟み込む句法が用いられている。逐語訳すれば「柳の條は、そよそよと風を逐い駆けているかのようだ」となり、柳の枝が春風になびいている様子をただ擬人法的に描写したまでであつて、末尾「去」字には、単に動作の方向を示す補語として、特に日本語として対応する訳語を加える必要がないのである。

このように道真公の詩は、白楽天の詩語（特にその口語語彙）を実に数多く自家薬籠中のものとして自己の創作に取り入れ、時にそれは、この「逐…去」のような文法的に更に踏み込んだものにまで及んでいる。思うにこれは、ただ単に当時最先端の詩歌集として『白氏文集』が流行した、ということだけでなく、同時に道真公の側にもそれらを正確に理解し得る中国語の語学的な素養、そしてそれを学び取ることでできる学習環境が整っていたことの証なのではないだろうか。特に筆者は、本稿に先立って執筆した小稿<sup>19</sup>において、当時「菅家廊下」に招かれていた渡来人王度の存在に少なからざる興味を覚えたのだが、かかる渡来人の存在こそが、道真公の中国語理解に大きな役割を果たしていたのではないか、という推論は、今後ただ王度一人のみに留まらず更に様々な角度から検証してゆくべき問題だと思われる。

ところでこの「不出門」詩の頸聯には、大変不可解な問題がある。すなわち、この対句のうち第五句「好逐孤雲去」は、大唐の都でも十分通用する中国語であるとして前節において確かめ得たが、それに対応する句「相逢満月迎」、つまりは「逢…迎」二字の挟み込み表現は、現存する唐詩に類例が無く、おそらくは菅公が独自に案出した、いわゆる日本独自の「和習」表現であろうと考えられることである。<sup>(20)</sup> 流麗な中国語表現と和習表現。この二つが混在しているこの対句は、道真公の漢詩のいつたい何を物語るのであろうか。果たしてそれは、単なる日本人としての悲しい限界として処理されてよい問題なのであるうか。

しかしながら、この表現について今筆者が指摘し得ることは、現在、菅公の詩歌において「和習」と判断されるその殆どの表現が「文法」としては確かに唐詩の規準からは外れるものの「平仄」という音律面での諧調は決して崩していない、という事実である。つまりこの「不出門」詩の頸聯の場合（は平声字、は仄声字）、

中懐好逐孤雲去　　中懐は　　好く孤雲を逐いて去り

外物相逢満月迎　　外物は　　満月を相違いて迎ふ

のように、七文字すべての平仄が見事なまでに反転しているのである。ちなみに、道真公が模範とした中晩唐の詩歌は、特に律詩においては、文法（使用される文字の意味）以上に平仄（文字の字音）が優先視されるという事実もある。<sup>(21)</sup> ここでいま一つの憶測が許されるとすれば、道真公は、「文法」としてはいささか不適當ではあるが、「平仄」としての諧調があれば、その表現は漢詩として成立することを、あるいは白居易をはじめとする中晩唐詩の幾つかの作例から察知していたのではないだろうか。

例えば、道真公の「和習」表現の中では、次のような例もこの推論の範疇に入る。<sup>(22)</sup>

從初到任心情冷

初めて任に到りしより 心情は冷たかりしも

(筆者注・讚岐守赴任をいう)

被勸春風適破顔

春風に勧められ

適たまたま破顔す

「春日尋山」詩・『菅家文章』卷三、二八

後半句冒頭の「被」字は、おそらく受身の助動詞「らる」として使用されているのであろうが、やはり中国語の句法として見た場合、やはりこれは一般的な文法からは外れるものである。しかしそのようでありながら、七言律詩としての平仄は、まことに整然と遵守されているのである。また、次の悲痛な詩句も然りである。

始謂微微腸暫續

始めは微微として腸こころの暫しばらくと続つげりと謂いわへりしが

何因急急痛如煎

何に因りてぞ急急として痛きこと煎煎らるるがごとし

「夢阿滿」詩・『菅家文章』卷一、二七

突然この世を去った愛児への追憶とその悲辛が、今日の我々にもこのほか哀切に響いてくる名作である。この「腸暫續」という表現は、おそらく漢語「斷腸」という言葉に基づき、それを「しばらくは持ちこたえていたのだが」というニュアンスで作られた菅公の造語であろう。しかしその平仄律は、寸分違わぬ精確さを保持している。

なお、基本的な説明があとさきになったが、七言句の平仄は、ことさらに七文字全ての平仄を反転させる必要はない。その切所は、各二字目・四字目・六字目であつて、それぞれが「 / 」もしくは「 / 」

となれば宜しい。だが、かかる三例の平仄式を見ると、道真公の「和習」表現には、単に日本人であることの限界というよりは、それとは逆に日本語特有の表現、あるいは日本人同士でしか理解し得ない細やかな感情の吐露に対する、実に堂々とした態度が、筆者には感じられる。すなわちこれらは、中国語の「文法」に照らし合わせた場合、確かにいささか耳慣れない表現ではあるが、而してそれらは「平仄」というもう一つの律詩の鉄則に

よって詩句中に填することが容認されているのである。特にこの三例に限定して言えば、これらは、左遷や愛児の死というまさに極限状態に向き合ったときの、虚飾の無い「たましいのさげび」のような句ですらある。あるいは道真公の意図するところは、これら日本語独自の表現を、漢詩という当時最高の文学世界に堂々と組み入れ、これを我々独自の「詩語」として認めてゆこうとする新しい試みであったとは言えないだろうか。ここまで考えたとき、もはや筆者にはこれ以上の判断材料を全く持ち得なくなってしまうが、少なくともかかる道真公の創作態度を窺い見るに、世にいう「国風文化」（日本文化の自立運動）というものが、単に遣唐使廃止の建議後に徐々に覚醒されていったものではなく、もう少し時間を遡り、すでに道真公の幼少期（承和年間）より、その蠢動があったとするのは、あるいは今後大いに首肯されるべき説であるかと思われるのである。<sup>(2)</sup>

## 注

- (1) 本稿における菅原道真の詩文の引用は、川口久雄氏校注『菅家文章・菅家後集』（岩波書店・日本古典文学大系72一九六六年）を底本とし、必要に応じて諸本を参看した。なお出典表記下の三桁の半角数字は、同書に付された作品番号である。
- (2) 例えば仁和二年（八八六）より寛平二年（八九〇）まで、道真公は讃岐守に任命され都を離れていたが、その間、彼が携行していた書籍を詠める詩に「謳吟す白氏の新篇籍、講授す班家の旧史書」「客舎書籍」詩…『菅家文章』巻四、二五九」とある。
- (3) ちなみに道真公の詩における白居易の影響について、筆者には「黄葉」が「紅葉」にかはるまで——白居易と王朝漢詩とに関する一考察——（勉誠出版『白居易研究年報』1、二〇〇〇年）という小レポートがある。
- (4) このことについて筆者は、湯浅質幸氏の近著『古代日本人と外国語』（勉誠出版二〇〇一年）に大いに導かれた。
- (5) 例えば後藤昭雄氏『平安朝詩文の「俗語」』（大阪大学国文学研究室『語文』第四十八輯、一九八七年）、松尾良樹氏『平安朝漢文学と唐代口語』（至文堂『国文学解釈と鑑賞』第五五巻一〇号、一九九〇年十月）などを参照。なお、筆

者は本稿に先立って「菅家文章」に見えたる口語表現」と題する小考を草した（和漢比較文学会編『菅原道真論集』に収録の予定）。本稿に併せてお読みいただければ幸いである。

(6) 例えば川口久雄氏「道真詩における和習と訓読の問題」（川口久雄氏・若林力氏共編『菅家文章 菅家後集 詩句総索引』所収、明治書院一九七八年刊）を参照。

(7) 『菅家文章』を續けば、当時宮中などにおいて数々の漢籍を講読する機会があり、その折々の菅公の詩歌が残されている。例えば左の通り、

- 〇五 仲秋釋奠、聽講周易、同賦鳴鶴在陰……………易經
- 〇四一 仲春釋奠、聽講毛詩、同賦發言爲詩……………詩經
- 〇四 仲春釋奠禮畢、王公會都堂聽講禮記……………礼記
- 〇八 仲春釋奠、聽講左傳、賦懷遠以德……………春秋左氏伝
- 〇三三 仲春釋奠、聽講論語……………論語
- 〇六 仲春釋奠、聽講孝經、同賦資事父事君并序……………孝經
- 〇四 史記竟宴、詠史得司馬相如……………史記
- 〇三三 漢書竟宴、詠史得司馬遷……………漢書
- 〇九 八月十五日夜嚴閣尚書授後漢書畢、各詠史得黃憲并序……………後漢書
- 四九 相府文亭始讀世說新書聊命春酒同賦雨洗杏壇花應教……………世說新語
- 〇五 九日侍宴、同賦天錫難老應制并序……………文選
- 〇六 九日侍宴、同賦紅蘭受露應制……………文選
- 二六 賦得春深道士家……………白氏文集
- 四 早春内宴侍仁壽殿、同賦春娃無氣力應制并序……………白氏文集

(など)

(8) この二字、底本は「所憤」に作り、諸本の多くもこれに従つた。ただし底本とした川口久雄氏の頭注（同書四八四頁）には、「憤」字に一本「憤」字を傍注する。しかし「憤」字でよい」との校勘が見える。川口氏のいう一本とは現存諸本のうち

の何にあたるのかは未確認ながら、筆者の愚考するに、この「所懐」の文字は今少し検討の餘地があるように思われる。「述所懐」という表現が、同時代の唐朝の表現としてはいささか馴染まない言葉であるとともに、次の注(9)に挙げる「秋思の詩篇」の本文が、「所懐」という激しい形容には少なからず不相応な印象を受けるためである。

(9) 『管家後集』<sup>四三</sup>「九日後朝同賦秋思應制」詩：「丞相度年幾樂思、今宵觸物自然悲。聲寒絡緯風吹處、葉落梧桐雨打時。君富春秋臣漸老、恩無涯岸報猶遲。不知此意何安慰、飲酒聽琴又詠詩。」

(10) 本稿における『白氏文集』の引用は、四部叢刊本(那波本)『白氏文集』を底本とし、必要に応じて諸本を参看した。そして出典表記下の四桁の数字は、花房英樹氏『白氏文集の批判的研究』(朋友書店、一九七四年再版)に付された作品番号である。

(11) 例えば、十八世紀の清朝における小説の最高傑作『紅樓夢』においても、各登場人物の性格や品行を暗示するようにさまざまな「香り」が配置されていることが、本誌前号の垣見美樹香君の論考「香りと『紅樓夢』——薛宝釵の冷香丸を中心に——」(九州大学中国文学会『中国文学論集』第三〇号、二〇〇一年)によって究明されている。

(12) 『玉台新詠』巻十、梁の江伯瑤「和定襄侯八絶 楚越衫」詩は、明らかに衣服に纏い着いた「餘香」の先例として挙げることができる。しかし、美女の薫香を想起すべき左の閨怨詩と道真公の詩との間には、なお幾ばくかの隔たりを置く必要があるであろう。

「裁縫在篋笥、薰鬢帶餘香。開看不忍著(一作開著不忍看)、一見淚千行」

裁縫して篋笥に在り、鬢に薫れるは帯びたる餘香、開き看るも着るに忍びず、一見して涙千行。

(13) 「一從」は「自從」に同じ。より。以来。時間上の起点を示す語。塩見邦彦氏『唐詩口語の研究』(中国書店一九九五年)、その一九六頁を参照。

(14) 「在」字は、ときに「於」字に同じく、動詞の直後に配置される助字的なはたらきを持つ。この「在」字の用例については、太田辰夫氏『中国語歴史文法』(朋友書店一九八一年)、その二五一頁を参照。また、かかる「在」字の用法は、白居易にも次のように見える。

長憂落在樵人手、賣作蘇州一束柴(『白氏文集』卷五十四、二四三)「東城桂三首」其二

長に憂ふは樵人の手に落ち、売られて蘇州一束の柴と作らんことを一方「就」字である場合も、その意味するところは「在」字に極めて近いように思われる。

絃清撥利語錚錚、背却殘燈就月明（『白氏文集』卷十九、三〇二「琵琶」詩）

絃清く撥利くして語錚錚たり、殘灯を背却けて月明に就く

能就江樓銷暑否、比君茅舍校清涼（同卷二十、三二四「江樓夕望招客」詩）

能く江樓に就きて暑を銷さんや否や、君が茅舎に比すれば校や清涼ならん

屈就商山伴麋鹿、好歸芸閣狎鴛鴦（同卷六十五、三三六「韋七以太子賓客再除秘書監以長句賀而餞之」詩）

商山に屈就しては麋鹿を伴とし、好く芸閣に歸りては鴛鴦に狎る

特に「就」字の場合は、「在」字ほどに助字的ではなく、「屈就」（下級職に甘んじて就くこと）など、実字としての意味をなお幾分かは強く有しているようにも見受けられるが、その口吻は極めて口語的な軽い語感を伴っている。従って、この道真公の詩の第一句は（就・在いずれであっても）「一たび柴荆に滴落せられてより」と訓むことも可能であり、特に「就」字および「在」字に強い意味を認める必要はないであろう。

ちなみに、道真公がここで「就」あるいは「在」字を詩句中に填したのは、ことさらに口語的な用語を好んだためではなく、主に七言詩の平仄を勘案しての措置と考えられる。

一從滴落就柴荆 万死兢兢踟躑情（荆・情の二字は下平声庚韻と清韻とで押韻）

右の平仄式において「就」字（仄声）が良いか「在」字（仄声）にするかはなお推敲の餘地があるが、正統漢文の「於」字（平声）を填した場合、「下三平」（七言詩の下三字を平声字で連続させる）の禁則を犯すことになり、第一句の音調が乱れるのである。

- (15) 菅野礼行氏『平安初期における日本漢詩の比較文学的研究』（大修館書店一九八八年）、その本論第一編第二章第二節「近代詩形の対聯に現れた表現上の特質——菅原道真の『不出門』の詩における比較文学的考察——」（一一八〜一八〇頁）はこの「纒」「口」の解釈や、頸聯「中懷」「外物」の意味などを考察した先行研究である。



(16) ただし、同じく太宰府での菅公の詩歌に次のような作品がある〔菅家後集「咒一」。

聽寺鐘二月十七日 寺鐘を聴く 二月十七日

欲識槌鐘報五更 識らまくほし 鐘を槌きて五更を報するを

三塗八難一時驚 三塗八難 一時に驚く

大奇春夏秋冬盡 大いに奇とす 春夏秋冬尽きて

爲我終無拔苦聲 我が為には終に抜苦の声無きを

この詩歌において道真公は、寺鐘を聴きつつ、仏の加護による自己の救済（抜苦）が無いことを歎息している。この心情は、あるいは「不出門」詩の筆者の解釈とは、全く正反対のものと見えよう。しかし、今や人生最大の危機に瀕している道真公の胸中を忖度するに、このようなアンビバレンツな心理状態こそ、より真実に近い人間像を映しているのようにも窺われる。かかる矛盾した感情が併存していればこそ、道真公の太宰府での数々の絶唱は生み出されていったのではなからうか。

(17) なお、これら各四字の直前の語「好」「相」は、動詞に軽く添えられる助字。日本語に訳出する場合、特に言葉を持たない。唐詩の代表作としては、次の二例が最も有名である。

知汝遠來應有意、好收吾骨瘴江邊（韓愈「左遷至藍關示姪孫湘」詩）

知んぬ 汝が遠來は応に意有るべし、好し吾が骨を収めよ 瘴江の辺に

深林人不知、明月來相照（王維「竹里館」詩）

深林 人知らず、明月來たりて相照らす

(18) かかる解釈の妥当性は、この詩が「門を出でず」という題であるという基本的事実によっても確かめ得るように思われる。道真公はここ太宰府にあつて特に罪人としての何らかの身体的拘束を受けている訳ではない（身の掬撃さるること無し）にも関わらず、「寸歩も門を出で行く」ことが無いと言っている。すなわち「外出の必要性が無いのは何故か」ということが、本詩を一貫する主題なのである。この頸聯の言わんとするところを私なりに補って解釈すれば「門を出る必要が無いのは、すでに 中懐 のみが孤雲とともに常に外出しており、 外物 にはいつも満月の光という

- 訪問客があるからだ」という意味になるのではなからうか。「ここに敢えて拙案を呈し、諸賢の批正を仰ぐものである。
- (19) 『菅家文草』に見えたる口語表現（和漢比較文学会編『菅原道真論集』に収録の予定）。
- (20) ただし「逢迎」は、来訪客を応接する意として、古く『戦国策』燕策に「田光 燕に造り、太子跪きて逢迎す」などの用例が見え、唐詩においても習見の語である。例えば盛唐の王維「與盧象集朱家（盧象と朱家に集ふ）」詩に「主人能愛客、終日有逢迎（主人は能く客を愛し、終日逢迎有り）」、また白居易「病中友人相訪」詩（四八）に「偶逢故人至、便當一逢迎（偶ま故人の至るに逢へば、便ち當に一たび逢迎すべし）」など。
- (21) このことの最も象徴的な例として賈島の「推敲」の故事が挙げられる。このことについては拙稿「賈島「推敲」考」（九州大学中国文学会『中国文学論集』第二十九号、二〇〇〇年）を参照されたい。また、道真公の「不出門」詩の頷聯「都府樓……」の句も、実は上三文字・下四文字で文節が切れるというまことにイレギュラーな対句である。しかしこのような試みが、すでに中唐の白居易より見られることは、松浦友久氏「白居易のリズム——詩型とその個性——」（勉誠社『白居易研究講座』第一巻、一九九三年）によって指摘されているところである。
- (22) この例は、和漢比較文学会公開シンポジウム「菅原道真の文学世界」の席上、金原理先生より質されたものである（附記参照）。
- (23) この例は、右に同じ公開シンポジウムにおいて、司会の藤原克己先生より質されたものである（附記参照）。なお、この二句の解釈については、近年、注（1）川口氏の頭注に対して別の新しい解釈が提出された。小島憲之氏・山本登朗氏共著『菅原道真』（日本漢詩人選集1、研文出版一九九八年）その五二―五九頁、および藤原克己氏『菅原道真 詩人の運命』（ウエッジ選書12、二〇〇二年）その一〇四―一〇頁を参照。
- (24) 藤原克己氏『菅原道真と平安朝漢文学』（東京大学出版会二〇〇一年）その第二章「転換期としての承和期」、および同氏『菅原道真 詩人の運命』（ウエッジ選書12、二〇〇二年）その二二七―二二〇頁を参照。

〔附記〕本稿は、二〇〇二年九月二十九日、福岡県の太宰府天満宮余香殿ホールにて開催された第二十一回和漢比較文学会大会の公開シンポジウム「菅原道真の文学世界」においての報告をもとに執筆したものである。本稿が提出する問題

は、いまだその一つ一つに十分な検証が施されているとはいえない難い状態にあるが、シンポジウムにおける筆者の発言内容と、その後の討論の時間に会場で大いに質疑された「和習」についての問題を、ここに記録すべく書き下ろした。未筆ながらシンポジウム司会の藤原克己先生、大会代表の金原理先生をはじめ、同会の多くの先生方、そして公開シンポジウムに参加され貴重な意見を頂戴した数多くの方々に深甚の感謝を申し上げます。